《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 81

はじめに

1月 27日。友人が営んでいる神保町の喫茶店「オトナリ珈琲」へ、温床のチッソ剤として「コーヒーかす」を譲ってもらえないかと頼んでいたものを引き取りに行った。たくさん溜めてくれていて、半分だけ持ち帰った。タライにあけて、日のあたる屋内で干す(図 81)。コーヒーが抽出されたあとの残りかす、乾かしたらこんなに綺麗なのかと驚いた。円盤状のものはエスプレッソのかすで、「ケーキ」と呼ぶらしい。 私は、自分のお店を営んでいる友人がいるという事実に、大きく支えられている。オトナリ珈琲はコーヒーもカフェラテもプリンもめちゃくちゃにうまい。そして通りを大型車が通れば店内も揺れる、素晴らしいお店である。

多くの人は知らない事実だが、日常的に建物が揺れるのは、大事なことなのである。私は大学卒業後の二年間、浅草にある、トラックが通ると揺れるビルに住んでいたことがある。日常的に震度1～2程度の揺れに見舞われていると、一見頑丈そうに見えるこの鉄骨の建物および、それが拠って立つ「地面」というものが非常にもろいものだということを意識せざるをえなくなる。地面は、常に揺れている。私たちは鈍感だし、だいたい「揺れ」とか、日常を揺さぶるものを嫌う傾向があり、なにかと対策してしまうので気がつかないのだがマジで意外と揺れているのである。その事実を増幅し、人間に伝えてくれるのが、揺れる建物なのだ。オイ、ぼけっとすんな、と喝を入れてくれるのだ。お金を払ってでも、建物は揺れるように作りなおすべきなのである。私たちは忘れっぽいから、仕事や生活に追われていると、目の前にある日常がこれからも続いていくものだと、すぐに思い込んでしまう。いわば世界を自らの手で、霞の中に閉じてしまう。「揺れ」はそんな霞を取りはらい、世界を再び開いてくれる。だから私は、オトナリ珈琲でお客さんが漏らす「え、揺れてない？」みたいな声が好きだ。そのとき、なにか命が輝いているような気がするのである。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

揺らぎがないとつまらない。だから私は、何かと不確定要素の多い「勉強堂」をやっている。ここからは、先日行った井戸掘りレポートとなる。前回の報告の続きである。

＜とつぜんの道中エッセイ＞

2 月 10 日夜、二度目の井戸掘りへ向かった。22 時 22 分、アトリエを車で出発。ポリタンクに水、着替えと洗面用具、寝袋とマット、パソコンを持ち、脚立は現地で買うことにした。下道で向かう。夜は道がすいていて気持ちがよい。唐突に停車したり、車線を変更してくるタクシーに四方を囲まれてひやひやしながら新宿南口の横断歩道、赤信号を待っている人たちの目の前を走り抜け、皇居のお堀に沿って進み、高そうな車が怪しい色にライトアップされている日産のでかいショーウインドーを横目に一枚写真を撮って、銀座の交差点を過ぎ、湾岸豊洲。風に車体を煽られながら、ららぽーとの看板。山武市が近づくと徐々に車がいなくなり、最後はハイビームで雑木林と畑と住宅と荒野の中を抜ける。ときどき、わざとライトを消して道端に停車し、闇の深さに「暗いな～」とつぶやいて、また走り出す。0 時 34 分に現場の最寄りのセブンイレブンに到着。トイレに寄ってから、しじみの味噌汁とサッポロ黒ラベルと枝豆スティックを買って、味噌汁にお湯を入れて車に戻り、現場に。

私の土地。これは「私の土地」らしいということを、いまだに理解できていないが。

朝、向かいの夫婦が畑をやりにくる可能性があるので、車を奥の崖ぎりぎりで停車させる。味噌汁とビールと枝豆スティックで晩酌。走っているといろいろなことが思い出された。望んだものとは限らない。いろいろな人の顔が浮かんだ。新しい人、大事な人、昔の友達、疎遠になった人。自由意志で決められる物事など、ないように思う。発泡スチロールの家に住み、広告看板にも住み、土地を買った。わけもわからずここまできた。なにかを冷静に判断できたことなど、一度もないのではないかと思えてくる。いまは、自力で井戸を掘ろうとしている。こんなことになろうとは、まったく。

井戸掘り二日目

翌 2 月 11 日。めちゃくちゃ晴れている。雲がひとつもなく、風もそれほど気にならない。日差しが気持ちいい。昨日は雪が積もるほどだったけど、そのような例外を除いてここ最近、春が近づいているのを感じる。空気の感じが、もう春だ。モンベルのインナーとダウンの2枚で、すこし暑いくらいである。

車内で起きて、9時に行動開始。コメリに行ってトイレで顔を洗う。前から欲しかった脚立と、VU75 管4m(井戸枠の延長用)を1本と VP20 管4m(井戸掘り機とオーガの延長用)を1本と、それぞれの延長ソケット3個ずつと、ベルトを持ってくるのを忘れてズルズル落ちてしまう作業用ズボンの固定のために 550 円の新しいベルトを一本と、ついでにかりんとうを一袋買って、塩ビ管を車上のキャリアーに固定しおえた頃には9時 50 分。

そのままコメリ駐車場で、持参したおにぎりとお茶で朝ごはん。おにぎりは明太子ふりかけ味。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 82

前回の報告で3m くらい掘ったと書いたが、これはちょっと盛っている。正確には2m50～60cm だった(図 82 で地面にささっている井戸枠の上から 10cm ほどのところに、深さ3m を示すラインがある)。

買ってきた脚立の梱包を解いて、井戸の前に設置、GoPro も設置してタイムラプスの撮影をセッティング。井戸掘り機とオーガをブルーシートの下から引っ張り出し、軍手をはめて井戸掘りを開始した。いま気がついたが軍手という言葉、「軍」という字が入っている。ウィキペディアによると「軍用手袋」の略で、旧日本軍が使用していたことに由来しているらしい。日常に戦争の影が潜んでいる。

数週間ぶりなので、作業はまず、井戸掘りの手順を思い出すところから。とりあえずオーガを突っ込んで、ぐりぐり回した(図 82)。

＜ひとこと＞

「脚立はすごい」と思った。思えば脚立というものを自分で初めて買ったかもしれない。これまでは、アトリエにある他の人のものを借りたり、設営現場で借りたりして済ませてきたが、今回は周りに誰も知り合いがいないので、購入した。そしてあたらめて、脚立の凄さを実感した。

当たり前だが、脚立があると上下に移動ができる。私たちは普段、前後左右にしか移動できないが、脚立があるとそこだけ三次元空間になる。しかも、それで地面を掘っている。縦方向の感覚が研ぎ澄まされる。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

「ぐりぐり」に手応えがでてきたら「ぽん」と引き抜いて、脚立から降りて、ドリルにこびりついた泥を木片でこそぎ落とす、という作業を繰り返す。

＜ひとこと＞

タンクに持ってきた水を入れるまでもなく、井戸の底には水が溜まっていた。昨日の雨のせいなのか、あるいはもう水が溜まっている層（帯水層というらしい）にたどり着いたのか。たった3m で？　裏の住人から 25m 掘らないと井戸水は出ないと言われて絶望していたが、ちょっと希望が湧いてきた。文字通り、水と希望が湧いてきた。

図 83

泥は固かった。ほとんど粘土みたいな可塑性がある。オーガのドリルから剥がれた泥には、ドリルの形がそのままトレースされていた（図 83）。陶芸に使えそう。今度、やってみよう（「今度、やってみよう」と書いた案件が、これまでにもいくつかあった気がするけど、ひとつもやっていない）。

図 84

オーガを引き抜くとき、なにかに引っ掛かる感触があるのでもしやと思い、オーガの取手の、先端から3m のところにテープで印をつけ（図 84）、それを突っ込んでみると、井戸枠の底よりも 50cm くらい下層を掘っていたことがわかった。つまり井戸枠の長さは3m しかないのに、ドリルで 3.5m のところを掘っていたということだ。今回の井戸掘りで参考にしている YouTuber の吉田さんも「井戸掘り機に印をつけろ」と言っていたが、なるほどこのためだった。

オーガの「ぐりぐりぽん」の合間に、ちゃんと井戸枠も沈めていく必要がある。だいたい3回「ぐりぐりぽん」をやったあと、ハンマーで井戸枠を叩く。何回も何回も。すると少しずつ沈んでいくのがわかる。まるで樹木の成長のような速度で。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 85

一撃につき 0.5mm くらいの、自分でも気がつかないほどの微々たる歩みではあるが、井戸枠の先端は確実に、地球の中心に近づいている。(図 85。左上から右下にかけて、すこしずつ井戸枠が沈んでいるのがわかると思う)

＜とつぜんの哲学コーナー＞

なぜ私は、ひとつひとつの打撃では気がつかないほど小さな動きなのに、結果として井戸枠が沈んでいることを理解できるのか？

ひとつは、過去を覚えているからである。5分前の井戸枠の高さを記憶しているから、現在がそれよりも沈んでいることがわかる。一回叩いただけでは気がつかないが、数百回の反復によって、その変化が認知できる量になる、ということをわかっているから、叩き続けることができる。私にはそれが理解できるだけの頭脳がある、ということになる。それがなければ、叩くのをやめてしまうだろう。無駄としか思えないから。これはわかりやすい例だが、似たようなことは身近にたくさんあるのではないか？　ひとつひとつの変化は微々たるものだが、それが大きな結果をもたらすことをどこかで知っているから、続けられるようなことが。

ふたつめに考えられるのは、まわりに動いていないものがあるからである。地上のすべてのものは、井戸枠との比較において、動いていない。これはつまり、井戸枠が沈んでいるとも言えるし、逆に井戸枠を主観とするならば、他のすべてのものが上昇しているとも言える。井戸枠の目で世界を見れば、地球がまるごと上昇していることになる。「すべてのものは、すべてのことは、定点を持てないんだ。それをわざわざ持たしてしまったのが、ジオメトリーなんだ」荒川修作の言葉が思い出される。

オーガの他に、井戸掘り機も使って掘っていく(前回の報告書の図 73 参照のこと)。小一時間くらい作業して、井戸掘り機を使うコツがつかめてきた。触覚の話なので、テキストで伝わるかわからないが、以下にその感触を書き出してみる。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 86

1.井戸掘り機を井戸枠に突っ込む。

2.先端が、途中で水の中に入る(のが伝わってくる)。沈む時に、先端の弁(図 86)が勝手に開く。

3.弁が開いた状態で水中を進み、底に達した時点で、弁が閉じる。

4.底に達した先端を、やさしく上に引き上げる。このとき弁は閉じられているので、周囲の水が、井戸掘り機の下に回り込むような水流が発生する(のが伝わってくる)。

5.この水流の発生により、底に溜まった泥がまきあげられる。これが重要である。井戸掘り機を上下に動かして弁の開閉を利用し、できるだけたくさん、まきあげるようにする。

6.同時に弁の開閉によって、巻き上げられた泥が、井戸掘り機の中に回収されていく。

7.ある程度やったら、井戸掘り機を引き抜く。中に溜まった泥を地上に捨て、また突っ込む。

1～7の繰り返しにより、いわば「土」を少しずつ「泥」に変えて回収することによって、掘り進めていくのである。

優しく井戸掘り機を扱っていたはいたが、やはり弁が心もとない。1mm のゴム板ではすぐにぺろんとめくれて、金属の枠の外にはみ出し、引き抜く前に中の泥が漏れてしまう。水の圧力に耐えられないのだ。特に、井戸掘り機を深く突っ込んでしまったとき、先端と泥の間でちょっとした真空状態が生まれ、引き抜くのに力がいる。ぽんと抜けた時にはたいてい、弁がめくれている。それを元に戻して、また突っ込むの繰り返しで、どうにか 50cm くらいは掘り進めた。

＜ひとこと＞

ふと作業の手を止めると、あたりがとても静かなことに驚く。わずかな環境音の他には、これといった音は聞こえない。ときどき電車の発車のベルと、遠くでなにか電動工具を動かす音が、かすかに聞こえるくらい。あとは長い塩ビ管の中で反響して響く、井戸掘り機と枠がぶつかる音と、倉庫のドアが風に揺れてきしむ音。それと、音ではないが、井戸掘り機を突っ込んで、地中を掘っている、というよりも、水の中で泥を巻き上げる感触が、塩ビ管を通して音として聞こえてくるようだ。井戸掘り機を落とす時のちゃぽん、という音と、回収した中の泥を地面にあけるときのざあ～という音が心地よい。録音してみた。→ https://vimeo.com/799457632

図 87

日が昇りきったころ、近所のセブンイレブンへ行った。「やみつきペッパーコーンバター」(図 87)と「納豆巻き」と烏龍茶と、おやつにバナナも買っておいた。

Twitter で「スペース アーカイブ」と検索して、一番上に出てきた番組を聴きながらお昼ご飯にした。(「スペース」というのは、誰もがラジオのような放送ができる Twitter の音声コンテンツサービスである)

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

＜突然のゆるコラムコーナー＞

番組はハンドメイド作品を販売して生計を立てている二人の「ぶっちゃけトーク」とのことだった。最初は会社勤めをしながら制作していたが、一年ほど前に会社を辞めて本業作家になった人に、以前から作家一本でやっている人が質問していた。「本業になって、なにが変わりましたか？」

「会社勤めをしていたときは、朝5時に起きて会社行く前に作業するみたいのを月－金でやってて、時間がなかったんですけど」

「えーすごすぎる！土日に朝から晩までずっと作ってる話は聞いてましたが、それは知りませんでした」

「だから、会社辞めて時間ができましたね」

この答えには笑ってしまった。1の次は2です、みたいなことを言っているな、と思った。「作家さんの知り合いが増えました」とも答えていた。

「一人が嫌じゃないひとじゃないと、つらいかなと」

「そうそう。一人の時間が多いからね」

「私は一人がすごく好きなので、世の中が遠い感じなんですけど」

「わかる～。気がついたら二、三日家出てない、みたいなね」

私は会話を聞きながら、確定申告のことを考えていた。この二人は、日々の支出の、経費かそうでないかの判断が楽だろうなあ、すくなくとも僕よりは……などと思ってしまった。私はどこからが「私生活」でどこからが「作家業」なのかの区分けがまったくと言っていいほど無いので、ほとんどの出費を経費にしてしまっている。毎年これでいいのかなあと思いつつ、しかし私は生活自体を作品化していたりもするので、これでいいのだと、結局そうしてしまっている。だいたい経費かどうかの区分けなど、厳密には存在しないのではないか？　またそういった行政上の区分が適応できない自分の支出を、どこかで誇りに思っていたりもする。

井戸掘り機の弁の改造

食後、井戸掘り機の新しい弁を作るのに必要なソケットおよび、布の軍手では不便を感じていたので、防水性の軍手を探しにコメリへ行った。必要なのは 20mm→50mm の異径ソケットなのだが、売ってなかった(25mm→50mm はあったのだが)。

とりあえず軍手だけを買い、車の中で数分考えた。ここから 20 分弱車を走らせて、「カインズ」まで行けばソケットは売っている(そこは県内で1、2位を争う巨大ホームセンターらしい)。だが今の1mm の弁でも作業ができないことはない。しかし今の私は3mm のゴム板弁の威力を知らないから、1mm でもいけるなどと寝ぼけたことを言えている可能性がある。それに、県内有数のホームセンターとやらを一度見てみたいとも思う。また、こうやって必要にかられて回り道をすることがもたらす新たな発見の大事さを、私は知っている。

という熟考の末、行くことにした。カインズ東金店資材館はめちゃくちゃでかかった。物量では近所のコメリの資材コーナーなど足元にも及ばない。びっくりしたのは、軍手のバリエーションである。100種類以上はあろうかという感じで、棚にずらりと並んでいた。だが、もう軍手は買ってしまっている。まっすぐに塩ビ管コーナーへ行き、必要なソケットをひとつだけ掴み、レジで 200 円ちょっとを支払い、現場に戻ってきた。

そして急に眠気に襲われ、15 時まで昼寝してしまった。「やみつきペッパーコーンバター」はいらなかったなあ、と思った。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 88

新しい弁を作った。まずは既存の弁を塩ビ用ノコギリで切断して、中のステンレスの枠を取り出す(図 88 左上)。次に 3mm のゴム板を円形に切り(同右上)、穴を開けて取り出したステンレス枠にボルトとナットで固定する(同左下)。それを延長ソケットにはめ込み、井戸掘り機の先端に接着剤で固定する(同右下)。これで完成。30 分ほどかかったが、使ってみるとすこぶる調子がよかった。弁がめくれないという安心感があり、のびのびと井戸掘り機を上下させることができ、作業が楽しくなった。

図 89

途中、井戸枠を 1m 延長して、最終的にこの日は 3m60cm くらいまで打ち込むことができた(図 89)。一日で 1m くらい進んだことになる。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

声たち(松の湯とココスにて)

風呂に行こうと、例の「クリーンセンター入浴施設」に電話をしたのだが、「今日の予約はもういっぱいなんです……」とのことだった。東金市の「松の湯」に行くことにした。松の湯は二度目である。

入り口で、二人の男性客が入れ違いに出ていった。脱衣所に入ると、番台のおじさんがモップで床を拭いていた。

「ちょっと待ってねえ、さっきのお客さんがびしょびしょにしちゃったの」

「ああ、そうなんですか」

おじさんは「そういうお客さんもいるの」と言って、モップの手を止めて私を見た。

「中で拭いてくれればいいんだけど、こっち出てきて拭くから」

「ああ、よくないですねえ」

「来るたんびに、文句言えねえしなあ」おじさんが笑う。「そうですよねえ」「すいませんねえ」「いえいえ」

「はい」おじさんが無事床を拭き終えて、番台へ戻った。お金を払う。480 円。

風呂場の中は、長い柄のペンキローラーとトタンが、前回と全く同じ位置に立てかけられていた。だが、雰囲気は依然と違った。まず、風呂場にもう一人客がいた。50代くらいのその客は、手首に巻いたロッカーの鍵の音をリズミカルに響かせながら体を洗っていた。それに、女湯の方も蛍光灯がついていた。前回はついていなかった。今日は繁盛しているらしい。塀越しに女の湯の壁画が見えた。「雲上富士」と書かれた、白い富士山だった。男湯は「赤富士」である。

報告書 No.4 でも軽く触れたが、浴槽の壁には木の板に手書きでいろいろな注意書きが書かれている。例えば一番大きな板にはこう書かれている。

・入浴マナー
・静かに入りましょう
・泳いだり
・体操
・運動行為
・タオルオケ
・入れるなどを
・禁止

「風呂の湯汲み出し禁止」と書かれた板もある。ここはシャワーが使えないので、風呂桶にお湯を溜めて体を流すのだけど、この注意書きにより、全て蛇口から溜めなくてはいけない(昔別府に滞在中に通った銭湯にもシャワーがなかったが、風呂の湯が使えたのでみんなそれで体を流していた)。体や頭を流すのに使う水の量に自覚的にならざるを得ない。シャンプーを流すのには風呂桶5、6杯くらいか、などと考える。

男性と二人、すこし離れて風呂に浸かっていると、女湯から声がする。

「あとどんくらい？」

男性は即座に「いいよ、どっちでも」と答える。相方が、向こうの風呂にいるらしい。

「あと 10 分くらい？」

「わかりました」

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

普段から敬語で話をしているとは考えにくいので、男性は、そばに私がいることを気にしているのだろう。

「20 分になったら体拭くでいい？」

「はい」

時計の針は 10 分を指していた。このとき、私は気がついた。銭湯の時計が、男湯と女湯の両方から見える位置にひとつだけ取り付けられているのは、これが理由だったのだ。仮にこの時計が狂っていても、二人の間では時間を合わせることができる。時刻が正確かどうかは関係ない。なんだか滋味深い話である。

男性は 15 分ごろに湯から上がり、脱衣所へ出ていった。

脱衣所で着替えていると、新しい男性客が入ってきた。すぐに、女性側の脱衣所の扉が開く音がして、元気な挨拶が聞こえてきた。

「こんにちはー！」

こちらの男性も、それに合わせて「こんばんは」と言った。

「大人3人子供1人です」番台の向こうから女性の声がする。お金を払おうとしている音が伝わってくる。

「大変だよ」と番台のおじさん。

「え？」

「会計さんは大変だなあ」

「ははは」

小銭の音と女の子の声がする。多分、小学生くらいの女の子がお金を数えてるんだろうな、と思った。

「あれ、五百八十円。わたし計算まちがえちゃった！足りない」お母さんの声。

「お金あるよ」こちら側にいるお父さんが応じる。

「ある？百円」

「はい、百円」

「あ、百円はこっちからね」番台のおじさんが、男性からお金を受け取る。

お父さんが自分のロッカーに戻る。「あれ、シャンプーもタオルもないや」

「えータオルも持ってきてないの？」向こうからお母さんの声。「タオルあるよ」

「貸して～。タオルとシャンプー」

「おっちょこちょいだなあ！」わざとらしいほどかわいい、女の子の声。

向こうの脱衣所で、賑やかな声が風呂場に入っていくのが聞こえる。お父さんも男湯に入っていく。

すぐに女湯から声がする「あっちい！」

「お水でないの？」

「こっちでるよ」これは男湯から。

「お水しかでない！」

「どこもでないの？」

「あれ、ここおみずしかでない！」

「ママなにしてんの？！」

「洗ってんの」

「あれ、ここもでない」

「ああーー！！お水だー！つめたい」

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

「大変だなあ、そっち」と男湯から。

「お水もらおー」

「あっちーー！」

桶の音、水の音が風呂場に反響している。賑やかだ。さらに、番台のおじさんが爪を切り始める。ぱちんぱちんという音が加わる。電話が鳴る。おじさんが取る。

「え？……3台しかないですよ。通りでもいいよ。……8時まで、4時から8時まで。え？　車大きいの？　大きい？　え？」

おじさんが電話を切る。「いやあ、いろんなお客さんいるなあ」

と一人つぶやく声に、私の隣で服を脱ぎ始めていた、新しいお客さんが「え？」と反応する。ポリフォニー……と私は思う。声の響く空間が、ここにある。

数としてはたった5、6人なのだが、この存在感……なんと力強いことか。たしかに「声」が響いている。SNSで、数百数千の言葉がいくら連なっても、ぜったいにこうはならない。「テキスト」ではない。生きている人の声が響いている。奇跡だ……と私はなぜか感無量である。なんだか「生きている感じ」がしたのだ。

いいもんみた、と思いながら、番台にお礼を言って、松の湯を出る。女の子の声は、銭湯の外まで響いていた。

風呂のあと、夕飯を食べにココスへ。混んでいる。ほぼ全客、家族連れである。

私は「カリブチキンとナッツのスパイスカレー」の「シーザーサラダセット」を食べた。また食べすぎてしまった。

隣に座っている5人家族が、「りゅうくんなんか食べないと。帰りの車が」「私ビール」「ビール何番？」「ビールひとつ」「番号言えって」「帰ったら、もう夜だよ」「ハンバーグ頼む？　ママ、スパゲッティとグラタンにしちゃった」「でもさあ、サラが大人になったなっていうのが、感じられたね。パパより頼りになるじゃん？」「いろいろ調べてさ」「状況がわからなくて」「今日のためにさ。仕事もさ、頑張ってさ。あと何日、ってさ。みんなで泊まりに来たかったから。私が来たかったから」「お土産が。お土産話しかない」「もう店あいてないよ」「しょうがないよ。ほんとの事言うしかないもん」「お土産を買う時間が…」「5時半から起きて頑張ってさあ、掃除して洗濯してさあ。明日も5時に起きてさあ。でもこういう早起きはストレス解消になるわけじゃん」「ビール遅いね」「混んでるから」「ファミレスだから」「カレー屋さん」「それはココイチね」「あら、そうなの」「そうなの、って私も思っちゃった」「ココスとココイチ、一緒だと思ってた」「ココスはハンバーグとか。包み焼きハンバーグが有名」「サラはほんとしっかりしてるね」「ほんと、どこ行ってもついてきてくれるし。行きたくなくても。どこでも来てくれる。ヤマダ電機行っても、買ってとか言わないし」「あれ買ってとか、言わないの？」「言わない」「でもさ、パパとかってさ。ママは嫌なことあったらさあ、酒飲んでさ、くあ～とかできるけどさあ、パパは飲まないじゃん。どうしてんの？」「いやべつに、なんもしないよ」「でもお酒飲まないの、いいじゃない」「でもさあ、前にママがブチ切れたときさあ…。あのときは、パパが我慢したんじゃないの？」面白すぎる。旅行か帰省の帰りなのか、会話がどんどん耳に入ってくる。東金に旅行に来たのか、海のほうに行った帰りとか、なのか？　早起きがストレス解消になるっていうのは、考えたこともない視点だった。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

隣の会話を追っていると、今日の作業記録がいつまでも書けない。パソコン作業をするのにファミレスがいいかと思ってココスに来たけど、隣の声がどんどん入ってくる。ぜんぜん集中できない。

結局、諦めて車の中で書くことにして、席を立った。店を出るとき、なぜかちょっと寂しかった。隣の家族と別れるのが寂しかったのである。そう感じたことに、自分で驚いた。家族でもなんでもないし、ひとこともしゃべってないのに、「さみしい」と思わせる雰囲気が、隣の席にはあった。家族の一員とまではいかないけど、遠い親戚くらいの親密さがあった。

先方は私のことなど針の先ほども気にしていないと思うが、出会えてよかった。

GEZAN の新しいアルバム『あのち』を聴きながら、車を走らせる。新譜で、ここまで奮い立たせてくれるものは久しぶりだ。攻撃的なのに排他的ではない、優しい力が血に染みこんでいくのを感じる。マヒトさんたちは、完全に次のステージに行ったようだ。私もやらねば。井戸を掘らねば。だがもう、頭の中は声でいっぱいになってしまっていた。ココスの家族とか、番台のおじさんとか、「おっちょこちょいだなあ」とか「ぶんらかつからかつからかぶんぶん」とか。私は寝ることにした。

現地で焼いて食べようと、家から「ししゃも」とカセットコンロを持ってきていたのだけど、お腹がいっぱいだったので、翌日にまわすことにした。車内に置きっぱなしだと朝日の暖かさでダメになってしまうと思い、ビニールに包んで外に出しておいた。これがまずかった。いわばこの時点で、未来が確定した。

消えたししゃも

図 90

図 91

図 92

翌朝ししゃものビニールは剥がされ、中身はからっぽになっていた(図 90)。一匹残らず食べられていた。車のすぐそばに置いていたのだけど、まったく気がつかなかった。見事な犯行だな、と思った。犯人の目星はついている。裏の家に住んでいる黒猫(図 91)か、現場にたびたび現れる茶色い猫(図 92)である。昨日は姿を見せなかったのに、私がししゃもの被害を発見したとき、この二匹は揃って現場のまわりをうろうろ歩きながら、こちらの様子を伺っていた。犯人は後日、犯行現場に再び現れる、という習性があるということを昔『名探偵コナン』かなにかで読んだ覚えがあるが、そういうことなんだろうか。

当然ながら、猫たちは悪くない。そりゃあ、道にししゃもが落ちてたら食べるだろう。彼ら彼女らには、所有という概念はないのである。所有なんて概念を信じているのは、人間だけなのである。でも、こうして姿を見せるということは、なにか後ろめたさのようなものを感じていなくもないのだろうか。

食べ残しがあったら嫌だったけど、全部ぺろりと食べてくれたのがよかった。きっとおいしかったのだろう。

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 93

井戸掘り三日目

ししゃものかわりにバナナを食べて、井戸掘りを再開した。井戸掘り機の柄を継ぎ足し、長さは 5m を超えた(図 93)。新しいゴム弁は快調で、日差しは暖かかった。井戸掘り機を5回くらいじゅぼじゅぼやってから、オーガでぐりぐりぽんを1回やり、ハンマーで叩くという手順を繰り返し、井戸枠は順調に沈んでいった。

途中、裏の滝口さん(前回の報告書ではじめて挨拶した近所の住人)がにこにこしながら訪ねてきた。「何をやろうとしてるの？」と聞かれたので、落ち葉の暖房や井戸水の冷房のことを説明した。「科学者みたいなこと考えるなあ、学者ですか？」と言われたのが、なんだか嬉しかった。滝口さんと立ち話をした。

「ここらはねえ、1坪 36 万したんだよ。平成元年頃は。みんな 1500 万くらい出して土地買ったんだから。ドブに捨てたようなもんだよなあ。聞いたところによると、30 万ぐらいで買ったんでしょ？」

私はどう返事をしたものか、迷った。むごい話である。ローンを組んで土地を買ったとして、35 年後にようやく支払いを終えたころに、隣の土地が 30 万円で売られているのである。1470 万円が消えたのだ。ししゃもとは比較にならない。

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

だが滝口さんは優しかった。「これからは手伝いを呼んで、何人かでいろいろやることがあるかもしれないので、お騒がせしますが」と言ったら、「まあ、ばか騒ぎしなければ全然大丈夫ですよ。ここらはみんな畑だから」と笑った。

「この裏もね、何十年も、田んぼやってたの。いまはこんなんだけど」(図 93 の左側に見える、開けた土地のこと)

滝口さんは「わたしも協力できることがあったら、言ってください。まあ、ないと思うけど」とも言ってくれた。

「逆に、なにかちょっとでも嫌だと思うことあれば、何でも言ってください」

「はいはい、まあ、安全に。安全だけは、気をつけてね。ではでは」

裏に住んでいるのが滝口さんたちで、本当によかった、と思った。

図 94

図 95

途中、井戸掘り機の弁が水圧に負けて奥に押し出されてしまい(図 94)、急遽作り直したりはしたが(図 95)掘削は順調に進み、井戸枠の深さが 5m に達したころ、突然、土の様子が変わった。

井戸掘り機から吐き出される泥が、それまでは濃い茶色の粘土質だったのに、灰色みを帯びてきて、粒は大きく、砂っぽくなってきたのである(図 96)。

図96:左がそれまでの土で、右が深さ5m 前後から出てきた土である。色と、の大きさが明らかに違うことがわかる。

《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.6**

揺れる家、井戸掘り二日目～三日目、声たちの日、消えたししゃも

作成者:村上 慧

2023 年 2 月 18 日

図 42

明らかに深さ5m 前後から地層が変わってきた。本報告書 No.3での、土の粒度実験が思い出される(図 42)。

水の中では粒の大きなものが下に沈む。つまりこれは、昔この土地が海だったころの名残なのではないか？ 想像が膨み、掘削が面白くなってきた。

井戸掘り機も快調で、日が暮れるまでせっせと作業を続け(図 97)、6m 弱の深さまで井戸枠を打ち込んだところで作業を終えた。

図 97

おわりに

グーグルでざっと調べたところ、かつて海だったこのあたりが陸になったのは 13 万年前～6千年前のどこかである。この臓物みたいな泥(図 98)は、そのころのものなんだろうか。なんだか、塩ビ管でとんでもないものを掘り出してしまった。そのうち貝殻などが出てくるかもわからない。引き続き注視したい。 文責:村上慧

＜おまけ＞

『大地の五億年』(藤井一至著/ヤマケイ文庫)によれば、「土」という漢字の成り立ちの一説として「縦棒の突き出た部分が植物、下の部分が根を表し、上の横棒が地表面、下の横棒が岩石面を表す」というものがあるという。「土」の縦棒には、途方もない時間が込められているのだ。次に「土」の字を手で書く機会があれば、悠久の時間を想像しながら、上から下に、心を込めて縦棒を書きたい。

図 98